

東照大権現の肖像

徳川幕府の初代将軍徳川家康（1542-1616）は、死の直前、武家や宗教家たちを呼び寄せ、最期の願いを聞かせた。久能山に遺体を葬り、日光に霊を祀るようにとの指示である。戦後まで、日本では著名な人物は死後、神として祀られるのが普通であった。家康公の死後、家臣たちはどのような神となるべきかを議論した。その結果、家康公の魂は東照大権現として祀られることになった。権現とは仏教の神が神道の神に化身したもので、家康の霊は日本中の僧侶や神職によって崇められた。

東照大権現の肖像画は、家康を神格化し崇めるために用いられた。多くの神社には少なくとも一体の東照大権現の肖像画があるが、特に東照宮に多い。（東照宮とは、東照大権現を祀る神社のことである。）久能山東照宮には5体の東照大権現の肖像画が所蔵されている。

東照大権現の家康公は正装しており、正確な肖像画と思われる。

肖像画 1

家康公が神格化されていることを示している。畳敷き、徳川家紋入りの垂れ幕、欄間は神社であることを示している。上下に描かれた雲は、この空間が地上ではなく、天上のものであることを伝えている。

紙本著色

作者不詳

天台宗の高僧で家康公の宗教顧問であった天海（1643年没）の銘文

肖像画 2

狩野派の第一人者で、幕府の初代御用絵師である狩野探幽（1602-1674）の作とされる肖像画。右下にあるのは、1636年から1662年にかけて探幽が使用した印章である。

上部の銘文は、後西天皇（1638-1685）の第五皇子、天真法親王（1664-1690）の歌とされる。天心は、徳川幕府の安泰と繁栄を祈願して創建された東叡山寛永寺の住職であった。

筆

狩野探幽（1602-1674）の作品

天真法親王（1664-1690）の銘文

肖像画 3

19世紀前半に狩野派を率いていた狩野養信（1796-1846）の作とされる。養信は1830年代から40年代にかけて、江戸城の火事から再建された際に、壁画の改修を指揮した。

絹本著色

狩野養信（1796-1846）の作品

肖像画 4

畳の台、縁側、一対の狛犬は、神社であることを表している。上下にある雲も、地上ではなく天上の空間であることを伝えている。

紙本著色

作者不詳

肖像画 5

現存する東照大権現の肖像画の多くとは異なり、神社を舞台としたものではない。そのため、被写体が人間としての徳川家康公なのか、それとも神としての徳川家康公なのかが問題となる。しかし、人物、姿勢、高くなった畳など、基本的な構図が他の肖像画と似ていることから、描かれているのは東照大権現神であることがわかる。

紙本著色

作者不詳

1967 年久能山東照宮に奉納